



Data

監督: 降旗康男

脚本: 青島武

出演: 高倉健/田中裕子/佐藤浩市
 /草彌剛/余貴美子/綾瀬はるか/三浦貴大/大滝秀治/長塚京三/原田美枝子
 /浅野忠信/ビートたけし

👁️👁️ みどころ

80歳を超えた健さんが「寡黙さ」の魅力を最大限に発散させながら、1,200kmのロードムービーに出発！故郷の海への散骨を願う亡き妻からの「一枚のハガキ」から始まった旅の中でのさまざまな出会いから、見えてくるものとは？そして、散骨を終える中で明らかにされる妻の想いとは？

205本目の本作に満足せず、健さんには更なる健闘を期待！



■□ロードムービーは「一枚のハガキ」から・・・■□

近年、高齢者の運転する車の交通事故が増大しているため、運転の自粛や免許証の返上が奨励されているが、81歳になったとはいえ「天下の健さん」こと高倉健の運転技術はまだまだ健在！それを前提として降旗康男監督が久々に高倉健と組んだ本作は、富山刑務所の指導技官である主人公・倉島英二（高倉健）が自家製のキャンピングカーを駆って、北陸から九州の平戸まで約1,200kmのロードムービーを描くもの。しかし、なぜ彼は総務部長の塚本和夫（長塚京三）に対して「退職届」を出してまで、そんな決意を？

新藤兼人監督の遺作となった『一枚のハガキ』（11年）は、戦友から預かった妻宛の「一枚のハガキ」がストーリーの軸となった（『シネマルーム27』91頁参照）が、本作では亡き妻・倉島洋子（田中裕子）から「故郷の海を訪れ、散骨して欲しい」と書かれた絵手紙が届いたことが旅の契機に。長年刑務官として独身を貫いていた倉島が、50歳を超えて刑務所に慰問に来ていた歌手・洋子と結婚したのは意外だったが、それは互いの孤独を感じとり、それを互いに埋め合わせるため。そんな共通する想いの中、富山刑務所の刑務官から指導技官に転身した倉島は洋子と寄り沿いながら静かな余生を過ごしていたが、若

い洋子の方が先に逝ってしまうとは何とも運命の皮肉。しかし、洋子はなぜ倉島にそんなハガキを？それを考えると倉島は居ても立ってもいられなくなり、洋子が楽しみにしていたキャンピングカーの改造を急いで仕上げると、1人長崎の平戸に向けての旅に。さて、そんな「一枚のハガキ」から始まった健さんのロードムービーの前途には何が？

■□■旅の醍醐味は、人との出会いと触れ合いーその1■□■

旅の醍醐味は美しい景色？おいしい料理？それともゆっくり浸かれる温泉？たしかにそれもあるが、旅の最大の醍醐味は人との出会いと触れ合いだ。もっとも、倉島のような仕事一筋で、「いかにもこりゃ公務員！」と一見してわかるような老人（失礼？）が1人でキャンピングカーを運転して長旅をしていけば、道中知り合う人の中には良からぬ奴もいるかもしれないので、くれぐれもご用心。

旅の最初に倉島が出会い触れ合い、そしてお友達になる（？）男がえらくおしゃべりな元教師の杉野輝夫（ビートたけし）だが、この男は信用できるの？彼のおしゃべりは仕事の話から人生論まで多岐にわたるが、面白いのは「旅と放浪の違いは何？」とえらく哲学的な問題提起をするところ。その答えは、「目的があるかないかだ」と私が心の中でつぶやいた途端、杉野から全く同じセリフが飛び出したからビックリ！もっとも、この時は杉野が何を言いたいのかわからなかったが、後になってなぜ彼がそんな問題提起をしたのかが明らかになる。ちなみに、倉島にははっきりした目的があるから旅だが、杉野の場合は？

■□■旅の醍醐味は、人との出会いと触れ合いーその2■□■

歌、映画、バラエティー、司会等々多岐にわたるSMAPの活躍には感心するが、本作にはそのメンバーの一人草彥クンがイカ飯を販売するため全国各地を旅する若者・田宮裕司役として倉島のロードムービーに絡んでくる。田宮はちゃっかり倉島のキャンピングカーにただ乗らせてもらったうえ、イカ飯づくりまで手伝わせる厚かましくも憎めない若者だが、時々ふと寂しそうな様子を見せるところが不気味……。平戸に到着するまでにまた会いましょうと言って、連絡先を交換して別れたが、ホントにこの男も信用して大丈夫なの？刑務官として悪い奴らを大勢観察してきた倉島は、人の善悪を見抜く能力を持っているはずだが……。

他方、気になるのが佐藤浩市が年若い田宮の部下の南原慎一役で登場していること。佐藤浩市の方が年上だから責任者が彼で、草彥クンがその部下という配役が妥当なはずだが、降旗康男監督はなぜ、あえて立場を逆に？しかもイカ飯を接点とした3人の男の出会いのストーリーでは、あくまでその中心が田宮で南原は刺身のツマ程度の位置づけだが、それはなぜ？あなたも私と同じように、きっとそんな疑問を持つはずだが、それは倉島が平戸に到着し、次に記載する「旅の醍醐味は、人との出会いと触れ合いーその3」の中で少しずつ明らかにされるから、その時のお楽しみに……。

■□■旅の醍醐味は、人との出会いと触れ合いーその3■□■

『単騎、千里を走る。』（05年）でも健さんは、京劇の仮面劇に夢中になる息子との確執に悩みながら1人中国雲南省を訪れたが、この時は切り立った雲南省独特の山の中で立ち往生・・・『シネマルーム17』233項参照）。しかし、本作は1,200kmも離れていても、所詮日本国内をキャンピングカーで移動するロードムービーだから、無事洋子の故郷である平戸へ到着。そこでは、最大の目的である海への散骨のため小船をチャーターしなければならなかったが、今はあいにく九州地方に大型台風が・・・。

そんな状況下での、「旅の醍醐味は、人との出会いと触れ合いーその3」は、港のすぐ近くで食堂を営む濱崎多恵子（余貴美子）や濱崎奈緒子（綾瀬はるか）、そして、奈緒子の婚約者である大浦卓也（三浦貴大）さらにその祖父である漁師の大浦吾郎（大滝秀治）たちだ。ここでのストーリー構成のポイントは、なぜか南原から「散骨のための船をチャーターするのに困ったら、ここを訪れなさい」と言われメモを渡されていたこと。台風のために困った倉島がそのメモを頼りに訪れたのが大浦だったわけだが、なぜ南原は倉島に対してそんな助け舟を・・・？ 一般的に田舎の人が親切なことはわかるが、本作ではいつものようにキャンピングカーの中で眠ろうとしている倉島を、多恵子と奈緒子が食堂に泊まりなさいと強引に誘うシーンが登場し、その触れ合いと語りいの中でそれぞれの人生が交錯していくことに注目！さすが、降旗康男監督の演出はうまいものだ。

そして、台風一過の翌日、いったんは船を出すことを拒んでいた大浦がそれを快諾したため、孫の卓也と共にびっくりするほど静かな海の上で倉島は無事散骨を終了。そんな中で人生経験豊かな倉島の中に見えてきたさまざまな人間模様とは・・・？

■□■吉永小百合と健さんはあくまで別格！■□■

私は平成20年10月に、吉永小百合主演113本目の作品である『まぼろしの邪馬台国』（08年）『シネマルーム21』74頁参照）が完成したのを記念してスカパー！が企画した『祭りTV！吉永小百合祭り』に出演し、熱烈な「サユリスト」の一人として彼女の作品をいろいろと解説した。しかし、健さんが出演した映画は本作で205本にもなるというからすごい。今や吉永小百合は日本を代表する女優として別格扱いだが、80歳を超えた健さんも今や日本を代表する男優として別格扱い！

健さんの持ち味は「男臭さ」と「寡黙さ」だが、本作でも降旗康男監督はいかなくその魅力を発揮させている。80歳を超えて前者の魅力は多少薄れているかもしれないが、後者の魅力は年をとるとともに、より増しているのでは・・・。新藤兼人監督は『一枚のハガキ』が遺作となってしまったが、健さんの場合は「一枚のハガキ」から始まるロードムービーである本作をラスト作品とせず、日本を代表する「別格」の男優として次の企画にチャレンジしてもらいたいものだ。

2012（平成24）年7月28日記